依存性の発達的研究：Ⅱ*

—— 大学生との比較における高校生女子の依存性 ——

国立音楽大学

**高 橋 恵 子

問 題

第Ⅰ報(高橋, 1968a)ですでに述べたように, われわれは人間が自立を獲得・増大せしめていく過程とは, 乳幼児期から通常の間が持つ依存要求により生じられる依存行動を, 年齢, 能力, 場などにふさわしく発達変容させていく過程のひとつとして記述できると考えてみようとしている。本研究は, このような人間のいわゆる依存から自立への変化, 換言すれば依存性の発達の変容過程を明らかにしようとするものである。

第Ⅰ報では, この考え方を確かめるために, 依存性の発達が一応の最終的狀態へと向いつつあると予想される大学生における依存行動の様相をみた。このⅡ報では, 大学生の結果と比較しつつ, 高校生における依存性の発達の變容過程に関する具体的な資料を得る。

ここで検討するのは主として次の3点である。

1° 大学生においては各個人の依存行動の対象間に機能分化がみられた。すなわち, 各個人において相対的に強い依存行動をひきおこし, その個人の存在を支える機能を中核的に果たす, 単数または複数の焦点を中心に, 焦点以外の幾人かが互いに異なる位置を占めていたが——これをあらわすモデルを依存構造(その意味において相互関連的な依存の対象の集合)と名づけた——, 高校生においてもそうした機能分化がみられるであろうか。

2° しかし機能分化は発達につれて明確化されていくと仮定されるところから, 大学生にくらべて高校生ではこれの明確なものは相対的には少ないであろう。このことは操作的には, 以下のように表現される。すなわち, 何が焦点であるかによる類型化を行なうと, 大学生においてはF型(単数焦点型)とMFまたは準MF型(複数焦点型)がみられ, 前者が約4割を占めていた。理論的

にはF型がMFないしは準MF型にくらべ機能分化が進んでいると考えられるので, 高校生では大学生よりもF型が少ないであろう。しかし, F型であるものでは高校生においても, 対象間の機能分化がなされているであろう。

3° 大学生においてはF型では愛情の対象(love object, 異性で一番好きな人)型が顕著に多く, ついで母親型, 尊敬する人型が多く, また, MF, 準MF型では母親が焦点のうちの1人となり, 母親型の変形型とみられる様相を呈していたが, 高校生ではどうか。

方 法

ここで用いた方法は, さきに大学生女子について報告したものとほぼ同様であり, 詳細は第Ⅰ報告(高橋, 1968a)を参照されたい。

1. 依存性のとらえ方

依存性を(a)依存行動の様式(依存の様式, modeと呼ぶ)とそのドミナンス, (b)依存要求が生じた際に依存行動が向けられる対象(依存の対象 objectと呼ぶ)の分化とその数・種類, (c)各対象に対して向けられる依存行動をひきおこす依存要求の強度(依存要求の強度と呼ぶ)の3要因によりとらえる。なお, 依存の様式としては次の5ことを考える。

様式① ともにあることを求める

様式② 注意を向けてもらうことを求める

様式③ 助力を求める

様式④ 保証を求める

様式⑤ 心の支えを求める

2. 質問票の作成

調査Ⅰ：これはさきに大学生女子に用いた調査を一部修正したもので, 5この依存の様式に分類される具体的な依存要求をあらわす24項目からなる。この24項目について, 母親, 父親, もっとも親しいきょうだいの1人,

* The Dependent Behavior in Female Adolescents : II

** by Keiko Takahashi(Kunitachi Music College)

同性のもっとも親しい友人、異性の友人で一番好きな人、もっとも尊敬している人、の計6人について、気持ちにあらはまる程度を5段階——〈そうである〉、〈どちらかというところである〉、〈どちらともいえない〉、〈どちらかというところがある〉、〈ちがう〉——に、それぞれの対象について独立に、都合6回評定させた。この得点によって依存得点を出した。得点の与え方は〈そうである〉——〈ちがう〉の5段階に、順に4, 3, 2, 1, 0を与え、1人の対象についての依存得点は24項目の合計であらわすというものである。

調査II：これは各個人における依存の対象の意味を、調査Iとは異なる角度からみようとするもので、文章完成法形式で、(II-a) その個人の存在を支えるという意味での機能を果たしているものが何であるかを自由に書かせるというものの5項目、および逆に(II-b) 予想される依存の対象の精神生活における意味や価値を記述させようとするものからなる。

3. 調査の対象と実施

対象は国立および都立の共学の高等学校3校の女子349名(1年180名, 2年128名, 3年41名)であり、実施には約50分を要した。調査の時期は、1964年10月～1965年6月である。

4. 結果の整理

結果の整理はさきに大学生女子において用いたものと同様である。

まず、依存構造の類型化は焦点が何かをもってその基準とする。焦点の基準としては原則的には調査Iで測定される依存得点が第1位のものをそれとする。ただし、第1位と第2位の差が小さい時には複数焦点と考えることにする。大学生女子における第1位と第2位の得点の差の分布を考慮して、恣意的に定めた基準は次のとおりであった。

すなわち、第1位と第2位の得点の差が10以上を「差あり」とし、それが3以下を「差なし」とする。他にくらべて依存得点が高く「差あり」と判定される対象——これが2人以上の時には、その間には「差なし」でなければならない——を「焦点」とみなす。そしてこのように互いに隣接した依存得点の差では上記の基準に合致しない場合には、真に「焦点」とみなされる対象があるか否かをみるために「ゆるい基準」を定めた。これは、隣接したものの得点差ではなく、第1位と第3位、第1位と第4位の各差をとり上記の基準にあてはめるというものである。

なお、これらの基準により同じく「焦点」とみなされる対象でも、「焦点」に向けられる依存要求の強度によ

って、他の対象への依存行動も異なるという質的差異が予想される。そこで、大学生同様第1位の得点によって上下に2分した*。

次に、依存構造内の対象の機能分化をみた調査IIの結果の整理も、大学生同様に次のように行なった。まずII-aの精神生活において各機能を果たしているものの記述では、人間、人間以外、自己の3つのカテゴリーに分類し、5項目についてどれが出されるかの頻度をみ、またII-bの各対象の記述では、肯定的情緒的、中性的、拒否的、同情的の4カテゴリーに分類した。

結 果

1. 依存構造の類型の分布

さきに大学生女子で定めた操作的な基準にしたがってみると次の3群の依存構造の類型化ができた(Table 1)。

1) 単一の対象の依存得点が他にかけはなれて高い単数焦点型(F型)

この型では、この単一の対象が得点からいって中核となる「焦点」になっていると予想される。F型ではこの対象がほとんどのケースのすべての依存の様式においてもっとも得点が高いことが特徴である。F型は上位群についてみると、高校生では全体の28.9%みられる。これを学年別にみると、1年生では24.3%、2年生では31.7%となり、またサンプルは少ないが参考までにみると3年生では46.7%となり、学年が上がるにつれてF型の出現率の増大の傾向がみられる。これを大学生の上位群の41.5%(168ケース中)と続けてみると、発達の方角としてF型化傾向が予想されよう。

F型ではTable 1みになるように「焦点」がどの対象になっているかによって、母親型、愛情の対象型、親友型、尊敬する人型、きょうだい型に分かれる。高校生では全体としてみると、愛情の対象型、親友型、母親型が多く、これに対してきょうだい型、父親型はごく例外的となっている。型の種類についての学年による変化はほとんどないといってよい。

この結果を大学生のそれとくらべると、大学生女子では愛情の対象型がもっとも多く、上位群のF型49ケース中26ケースを占め、ついで母親型と同じく11ケースが多く、逆に少ないのが親友型、父親型、きょうだい型であった。この結果、一般的傾向としては次の4点が指摘で

* 全体的に〈そうである〉の側に偏っているために、〈そうである〉→〈ちがう〉の5段階のうち、高い方から2つめの〈どちらかというところである〉よりも高いか、低いかによって2分した。得点でいえば72(3×24)点以下と73点以上に2分した。

Table 1 依存構造の類型と実数

focus Type	F 群						MF 群			quasi MF 群			DF 群	Total
	母 親 型	love object 型	親 友 型	尊敬 する人 型	父 親 型	き よ う だ い 型	2F 型	3F 型	4+F 型	quasi 2F 型	quasi 3F 型	quasi 4+F 型	DF 型	
上位群	16	17	17	7	2	1	29	9	6	40	40	19	5	
Total	60						44			99			5	208
下位群	7	2	8	3	1	2	13	8	7	29	23	32	6	
Total	23						28			84			6	141

きる。

(1) 母親が「焦点」となることは高校生、大学生においてともに多く、かねてから指摘されている日本の女子における母親との結合の強さを、この結果からもうかがい知ることができる。

(2) 愛情の対象が「焦点」となるものは、すでに高校1年生からみられ、大学生になるとさらに増加する。

(3) 親友型は高校生では多いのにたいし、大学生になると急激に減少してしまう。一般に大学生ではどの型においても親友は依存得点が低く、また、やや愛情の対象と競合する対象であった。高校生における親友の意味・役割と、その大学生における変化は注目すべき問題であろう。

(4) 一般に女子においては父親は依存行動の向けられることが少ない対象である。

2) 2人以上の対象の依存得点が他とかけはなれて高い複数焦点型

この型の中には、第1の基準により複数焦点型と判定されるもの(MF型)と、第1の基準によってはどこまでが焦点かを定めがたく「ゆるい基準」によって準-複数焦点型と判定されるもの(quasi-MF型、これを準MF型と呼ぶ)とがある。MF型、および準MF型は依存得点からいえば複数の「焦点」を持つと予想されるもので、これらの型においては、複数の「焦点」が補いあって、ほとんどのケースにおいてすべての様式の最高得点を占めている。このMF型、および準MF型に属するものは Table 1 のとおりで、2人が他に比べて依存得点が高いもの(2F型または、準2F型)、3人が高いもの(3F型、準3F型)、4人以上が高いもの(4+F型、準4+F型)がある。なお、これらの複数の「焦点」の組み合わせは Table 2 および Table 3 のとおりである。まず2Fおよび準2F型の組み合わせでもっとも多いのは、

Table 2 2F および quasi 2F 型の組み合わせ

object	M 母 親	L love object	I 親 友	R 尊 敬 す る 人	F 父 親	S き だ い う	計
M		12	7	2	7	5	33
L			20	6	1	1	28
I				3	0	4	7
R					0	1	1
F						0	0
S							
計		12	27	11	8	11	69

Table 3 3F および quasi 3F 型の組み合わせ

組 み 合 わ せ		計
M—F—X	—I (10)	22
	—S (3)	
	—L (3)	
	—R (6)	
M—X—Y	—I—S (8)	20
	—I—R (2)	
	—L—I (6)	
	—R—L (1)	
	—R—S (1)	
	—L—S (2)	
I—X—Y	—L—R (2)	7
	—L—F (4)	
	—R—S (1)	

〈愛情の対象-親友〉型という、異性および同性の友人という友人同志のものであり、これが69ケース中20ケース

みられる。次に多いのは〈母親・愛情の対象〉型の12ケースとなっている。また、この2Fならびに準2F型では6人の対象の中で「焦点」となる頻度がもっとも高いのは母親であり、全体の約半数(33/69)において母親は「焦点」のうちの1人となっている。逆に、父親、尊敬する人、きょうだいはそうなることが少ない。特に父親は、〈父親-母親〉という母親との組み合わせで、しかも高校1年生においてのみ頻度がやや高くなるだけで(5/34)、2年生になるとわずか1ケースとなり、全体を通して〈父親-X〉というような母親以外の対象との組み合わせは1ケースしかないことが注目される。父親はF型同様ここでも「焦点」となることは少なく、また年令とともにその傾向が強くなるようすがうかがわれた。

大学生の結果と比較してみると、F型におけると同様に母親との結合は大学生でも強い。大学生のMF型では「焦点」のうち1人がほとんどのケースにおいて母親であり、MF型は母親型的傾向すらみせていた。また、高校生が大学生と異なる点は、親友における依存得点においてである。F型においても前述のように大学生においては118ケース中、親友型は3ケースしかみられなかったし、どの類型においても一般に同性の友人は得点が高くはなく、愛情の対象とやや競合していた。これに対して高校生ではF型同様MF型および準MF型においても、親友の依存得点は高く、しかも〈愛情の対象-親友〉型にみられるように両者は競合しない。これらから高校生期における友人の役割が注目される。また、どのようにして大学生になると同性の友人が重視されなくなるのか、それは愛情の対象といかにして競合的になっていくのか、などの推移は重要であろう。

また、3F型および準3F型では、Table 3のように比較的多いのは〈母親-父親-親友〉型、〈母親-親友-きょうだい〉型などであり、2Fならびに準2F型同様、これらの型の組み合わせの1人が母親であることが多い。それが全体の85.4%になっている。また、そのうちの1人が親友であることも多く、64.6%がそうである。ここでも母親との結合の強さと、高校生における同性の友人の重要性が注目されよう。一方父親はこれらの型においても母親と共にしか「焦点」の1人となりにくい。しかも父親が母親と共にでも「焦点」となれるのは、ほとんど高校1年生においてのみであり(9/31)、2年生になると減少する(2/15)。また、〈愛情の対象-親友-X〉という組み合わせも12ケースみられた。

3) 「ゆるい基準」によってもどこまでが焦点かを定めたいもの(DF型)

DF型はTable 1のように、上位群208名中5名、

下位群141名中6名となっている。

2. 各類型における依存行動

次に、各類型における依存行動を具体的にみていくことにする。ただし、ここでは人数の関係上、大学生女子同様上位群に限ることにしたい。

1) 母親型

これは評定させた6人の対象のうち特に母親への依存得点が高く、先の操作的基準により母親が「焦点」と想像される型で、16ケースみられる。この型の特徴を調査I、およびそれとは独立な調査IIの資料からみると、次のとおりである。

まず、「焦点」と判定された母親が真の意味の焦点となつているか否かをみる。精神生活におけるその対象の価値や意味を文章完成法形式で記述させた結果(調査II-a)では、母親は16ケース中13ケースで肯定的情緒的な規定をされ、2ケースが中性的規定、1ケースが無答で、精神生活において母親は情緒的に受容されていることがわかる。そしてまた、個人の存在を支えるという意味の機能を果たしているものについての記述(調査II-b)では、16ケース中12ケースにおいて5つの機能のうちの1つ以上で母親をあげ、残り4ケース中3ケースは無答、1ケースは自己をあげている。Table 4にみるように、母親は「たよりにしている」、「つらい時の心の支え」、「つらい時に思い出す」、「心のよりどころ」としてあげられているが、「生きがい」としてはあげられないことが注目される。このように依存得点(調査I)からいって「焦点」と判定された母親は文字通り依存行動の向けられる中核的な対象になっているといえよう。

次に、このような母親焦点型における他の対象の役割分化はいかなるものであろうか。まず、依存得点の配分からみると、各様式において、どの対象の得点が高いかを図式的に表わしてみるとTable 6のとおりになり、どの様式においても焦点である母親が第1位を占め、様式④、⑤を除き、一般に親友、愛情の対象が上位に出て、逆に、父親、尊敬する人は下位になる傾向がある。大学生女子における母親型が愛情の対象は例外として家族中心型と呼んでもいいほどに、母親、父親、きょうだいが優位であったのに比べ、父親の位置の低さと、同性の友人の役割の重視のされ方が注目される。まず父親は、精神生活における規定をみると、無答1ケースを除く15ケース中、肯定的規定が8ケース、中性的4ケース、拒否的3ケースとなり、約半数が父親を肯定的に受容していない。また、存在を支える機能を果たすものの記述では、父親が単独で出現したのは1ケースの「たよりにしている」においてのみであり、母親と共に両親と

Table 4 精神的な支えの機能をはたすものの頻度

Type mode		母 親 型 n=16					love object 型 n=17					親 友 型 n=17					尊 敬 する人型 n=8				愛 情 の 対 象 - 親 友 型 n=20								
		私 の 心 の よ り ど こ	私 の 生 き が い は	私 が も っ と も た よ い	つ ら い 時 私 の 心 の は	支 え と な る の 心 は	つ ら い 時 に ま ず 私	私 の 心 の よ り ど こ	私 の 生 き が い は	私 が も っ と も た よ い	つ ら い 時 私 の 心 の は	支 え と な る の 心 は	つ ら い 時 に ま ず 私	私 の 心 の よ り ど こ	私 の 生 き が い は	私 が も っ と も た よ い	つ ら い 時 私 の 心 の は	支 え と な る の 心 は	つ ら い 時 に ま ず 私	私 の 心 の よ り ど こ	私 の 生 き が い は	私 が も っ と も た よ い	つ ら い 時 私 の 心 の は	支 え と な る の 心 は	つ ら い 時 に ま ず 私	私 の 心 の よ り ど こ	私 の 生 き が い は	私 が も っ と も た よ い	つ ら い 時 私 の 心 の は
人 間	母 親	5		8	7	6	3	1	6	2	1	1		9	2	1			1			1	1	4	2	3			
	父 親	1		5	1		1		4					7									1	5	2	1			
	家 族	2		2	1			1		1		1			1						1		1	1	1				
	きょう だい						2		1	1	1			3	1	2						1	2						
	love object						7	5	4	9	8									2	4	2	4	4					
	友 人	1	1	2			4	3	4	4	1		1	4	3	2	1		1	2		5	3	4	6	5			
	その他			1	1	1			2	1	2			1			1	1		1	1		1						
人 間 以 外	生き方		7		1	1	1	2				2	7							1	1	4			1				
	神				1																								
	格 言																		1	1			1						
	その他	1	2		1	3	1	7		3	2	3	1		2	4	3	4	1	2	1	2	1		3	3			
自 己				1			1		1	2		1	1	1	1			2		1				4	4				

Table 5 各 object の mode 別の得点

	母親型 n=16				love object 型 n=17				親友型 n=17				尊敬する人型 n=8				親友-愛情の対象型 n=20			
	①+②	③	④	⑤	①+②	③	④	⑤	①+②	③	④	⑤	①+②	③	④	⑤	①+②	③	④	⑤
母 親	85.3	86.9	87.5	80.4	53.9	54.9	47.6	48.1	63.0	65.0	67.4	60.6	48.9	50.0	44.0	37.6	67.7	64.3	66.0	56.7
父 親	60.6	60.9	69.0	55.6	41.4	42.7	48.6	42.6	50.4	54.1	55.9	48.1	37.7	42.9	36.9	33.4	62.3	60.8	71.8	55.9
きょうだい	57.1	63.2	55.7	57.8	50.5	55.8	45.7	45.5	53.9	65.0	57.1	48.1	33.1	37.1	35.3	28.6	51.0	50.0	49.9	48.8
親 友	71.9	70.7	68.2	53.9	68.8	67.9	64.4	54.2	90.7	85.6	80.2	75.8	53.7	64.3	53.7	46.9	88.4	91.1	80.6	80.3
love object	67.3	63.5	68.0	58.5	92.2	83.8	80.0	90.5	65.9	66.7	67.2	69.9	40.6	39.0	41.8	35.0	86.9	86.3	84.9	87.1
尊敬する人	51.8	48.3	68.8	52.7	65.8	64.0	76.8	48.4	55.8	60.6	67.4	63.6	88.1	77.9	88.9	88.1	51.7	49.6	75.2	52.5

(註) 数字はすべて最高得点に対する比に換算したもの
各 mode の項目数は ①+② 7, ③ 5, ④ 6, ⑤ 6 である。

Table 6 母親型における mode 別の object の得点順位

mode	order					
	1	2	3	4	5	6
①+②	M	A	L	F	S	R
③	M	A	L	S	F	R
④	M	F	R	A	L	S
⑤	M	L	S	F	A	R

ただし: M(母親), F(父親), S(きょうだい),
L(love object), A(親友), R(尊敬する人)

してあげられるのが普通であり、それも、「たよりにしている」に集っている。これはやや道具的色彩の強い様式④でのみ、優位になるという得点上の結果と一致している。大学生においても一般に父親は依存行動が向けられる対象とはなりにくかったのであるが、その唯一の例外が、大学生においては母親型であった。これに対して、高校生では母親型も含めて一般的に父親はさらに中核的对象とはなりにくく、しかも同じ母親型でも高校1年生と2年生を比較すると、2年生の6ケースでは様式④においてきょうだいが最下位の他は父親はすべてにおいて最下位となり、高校生では学年が上に行くにつれて

父親は依存行動の対象となりにくくなっていくようである。この点については是非、同一ケースの発生的研究が必要であるが、先の大学生の資料においては、父親がやや心理的に受容されているのを見ると、成長に伴う何らかの意味での父親の再受容の過程を仮定できるようにも思われる。

次に、もっとも親しい同性の友人（以後これを親友と呼ぶ）は様式①+②、様式③で優位になり、大学生女子に比べ、より中核的に位置づけられている様子がうかがわれる。精神生活の規定の記述においても、無答を除く14ケース中10ケースで肯定的情緒的に、4ケースで中性的に規定され、情緒的に受容されている傾向がみられる。また、存在を支える機能の記述においても、親友が3ケースで現われているほどである。

また、愛情の対象は大学生の母親型ではいわゆる「恋人」をもたない傾向が著しかったのであるが、高校生でもややその傾向がみられ16ケース中12ケースが無答、2ケースが中性的に「ボーイ・フレンド」、「あそび仲間」などと記述しているだけで、肯定的情緒的に記述しているのはわずか2ケースであった。

つぎにこの型に属する典型的な事例をとりあげる。

事例 25（高1女子）：家族は父、母、兄、弟と本人の5人。依存得点からいえば「焦点」が母親で86、次が同席の親友で73、父親64、きょうだい（兄）64となり、愛情の対象、尊敬する人はいない。

まず、すべての様式において「焦点」と判定される母親が最高得点を占め、母親は精神生活の意味の記述においても、「私の一番の大切な理解者である」と肯定的情緒的に規定され、また、存在を支える機能においても、「たよりにしている」、「つらい時の心の支え」、「つらい時に思い出す」の3つにおいて単独であげられ、中核的機能を果たして焦点となっていることがうかがわれる。

その他の対象として得点から重視されているのは親友であるが、親友が様式⑤では父親が1点の差で2位になっているのを除き、その他の様式ではすべて2位を占め、しかも、様式①+②、および④が優位な対象となっている。また、意味の記述においては「私のいろいろなことのよい相談相手」とされ、また、存在を支える機能においては「生きがい」として「学校へ行って親友と話をすること」と記述され、親友がかなり重要になっている。親友は様式⑤よりは④が高いという焦点とはやや異なる位置づけをされている。また、父親は「一番理想とする男性であり」、きょうだいは、親しい方として兄が選ばれ、「よい話し相手」と記述され、「心のよりどころは」「明るく健全な家庭があること」とされ、親友を

重視しながらも母親を中心とする家族に対して親しみを持っていることがわかる。

2) 愛情の対象型

これは依存得点からいって愛情の対象のそれが顕著に高く、「焦点」と判定される型で、全体で17ケースみられた。

まず、「焦点」と判定される愛情の対象が真の焦点といえるか否かを、調査Iとは独立の資料でみると、精神生活における価値、意味の記述では、5ケースの無答を除き、すべてにおいて肯定的情緒的に規定されている。また、存在を支える機能においても Table 4 に見るように愛情の対象が出現するのはF型ではこの型においてのみであり、11ケースが5つの機能のうちの1つ以上において愛情の対象をあげ、中には5つのすべてにおいてあげているものすらある。特に、他の類型においては人間が出にくい「生きがい」においても、愛情の対象が出現するのは興味ぶかい。しかし、この型においては Table 4 にみるように、親友および「たよりにしている」という機能では、父母なども出現していることが注目される。おそらく「たよりにしている」という機能の中には純粋な精神的・情緒的なたよりだけに止らず、経済的なたよりなどの道具的色彩も含まれてくるために、父・母が高く出てくると思われるが、親友の出現頻度が一貫して高いことは、後に考察したい。

しかしともかく「焦点」と判定される愛情の対象は、他の型における愛情の対象とはっきり性格が異なり、依存行動の向けられる中核的な対象になっているといつてよいであろう。ただし、この焦点は母親のそれよりは道具的依存行動というニュアンスが減り、また、親友をかなり中核的に重視しているという特徴がある。

次に、この型におけるその他の対象の役割分化の様相をみると、まず、各様式別の依存得点の配分は Table 7 のようで、すべての様式において焦点である愛情の対象が第1位を占め、次に著しいことは、親友・尊敬する人

Table 7 love object 型における mode 別の object 得点順位

mode \ object	order					
	1	2	3	4	5	6
①+②	L	A	R	M	S	F
③	L	A	R	S	M	F
④	L	R	A	F	M	S
⑤	L	A	R	M	S	F

が優位であり、逆に家族（父・母・きょうだい）がどの様式でも一貫して下位になっていることである。つま

り、高校生における愛情の対象型は家族外の他人中心的な型になっているのである。

まず親友についてみると、親友は先にみたように、機能の記述においてもかなりの程度出現し、精神生活の価値・意味の記述においても無答3ケースを除く14ケース中、10ケースにおいて肯定的情緒的に記述されている(4ケースは中性的規定)。また、得点からいっても9ケースで第2位を占めている。では、なぜこのように親友が重視されてくるのであろうか。第1に考えられる理由は、全般的に高校生においては親友が重視されているため、その効果がここにも及んでいること、そして第2は、これは愛情の対象と親友が共存している理由についてであるが、異性も同性も区別なくひとつの親友というカテゴリーに入れられるほど未分化であるために、両者が高いか、もしくは「男性」の親友と「女性」の親友として区別されるために、親友同志として競合するに至っていないかである。この点の是非についてはさらに検討したい。

次に得点が高いのは尊敬する人であるが、具体的にこれがだれにあたるかのチェックが不十分であったために明確でない。しかし、調査Ⅰでは、いわゆる偉人や身近かでない人間については記入しにくく、無答欄が多くなるために無効になる(1人の依存の対象につき無答3以上をその対象についての解答を無効とした)ので、数ケースにあげられているような、おじ、いとこ、先生などが考えられる。

母親はすでに指摘したように、一般に女子青年においては得点が高いのであるが、この愛情の対象型においては、例外的に低い場合が多い。17ケース中5ケースにおいて母親は2位であるが、10ケースにおいて最下位または下から2位となっている。精神生活の価値・意味の記述においても、母親を無答3ケースを除く14ケースにおいて、9ケースが肯定的情緒的に規定しているものの、拒否的2、中性的2、同情的1とやや距離があるものがみられる。

また、父親は得点からいって最下位のケースが16ケース中10ケースであり、一般にほとんど例外なく得点が低い。精神生活の価値・意味の記述においても、3ケースの無答を除く14ケース中、肯定的情緒の規定が5、中性的が4、拒否的が4、同情的が1で、情緒的に受容されない場合の方が多い。母親が上位の場合、それに付随するように上位に上ってくる傾向のある父親では、母親が低い愛情の対象型ではさらに下位に行くことは十分予想できる。

このように愛情の対象を中核としながらも、親友がか

なりそれに近く、ほとんど家族以外の他人中心的な高校生の愛情の対象型を大学生のそれと比べると著しいことは、次の3点である。

まず、大学生における焦点である愛情の対象は、高校生同様、人間の出にくい「生きがい」においても出現すると同時に、その意味・価値の記述の表現においても、独占的・絶対的な色彩をおび、愛情の対象として高校時代よりは成長していることがうかがわれた。第2に著しいことは、これが同性の親友とやや競合する傾向があることであった。また、大学生においては様式④において尊敬する人が上位になるという様式による対象の分化がみられるが、他の様式では母親とそれに附随的に父親が上位になっていた。

なお、愛情の対象型では、他の型とは異なり、具体的には愛情の対象が存在しなくても焦点になる場合がある。本サンプルの中にも1ケースみられたが、具体的には存在しなくても、それを受け容れる場所があるという意味で、愛情の対象型に入れてよいと考えている。すなわち、依存要求の充足は、依存の対象が精神的な助力を実際に与えている場合のほか、かつて充足させたことがある対象、充足させると期待された対象、充足させることが予想される対象、充足することになるであろうと期待される対象によっておこると考えている。

次に、この型に属する典型的な事例を示そう。

事例 38 (高3女子): 父、母、兄と同居している。依存得点からいえば「焦点」が愛情の対象で90、次が親友で78、兄が9、母が5、父が3で、家族の得点は極端に低い。尊敬する人は特にない。

まず、すべての様式において「焦点」とみなされた愛情の対象が最上位を占め、「とても大事な人」と記述され、存在を支える5つの機能の記述のすべてにおいて、この「ごく親しいボーイ・フレンド」が出現している。また、得点からいって第2位の親友「ごく親しいガール・フレンド」は「よりどころとなり、一番自分が安心できる人」となり、愛情の対象も親友も様式①+②と⑤が相対的にドミナントな対象となっており、得点からは愛情の対象型とみなされるが、実質的には〈愛情の対象-親友〉型的になっているといえよう。その他の対象では、母親は父親とともに「親であるのにすぎない」とやや拒否的に、兄も「ただの兄、時には話し相手」と規定されており家族は重要性が少ない。

3) 親友型

他にくらべて親友の依存得点が顕著に高く、基準に照らして親友が「焦点」と予想されるこの型は、本サンプルでは17ケースみられた。

まず、この親友が真の焦点といえるか否かをみると、精神生活における価値・意味の記述においては、無答3ケースを除く14ケースにおいて、親友はいずれも肯定的・情緒的に記述されている。また、存在を支える機能を果たすものの記述では、無答2を除く15ケース中、親友が5つの機能のうちの1つ以上で出現するのは6ケースであり、親友をあげずに1つ以上において父または母、きょうだいなどをあげているのが6ケース（そのうちで母親がもっとも多い）、他は自己または人間以外をあげているもの3ケースとなっている。特に、道具的意味が加味されていると思われる「たよりにしている」で、母・父が高く出ていることが注目されよう。

このように得点から「焦点」とされる親友型では、親友が中核的とはいえるが、母親も中核的であり、前記2つの類型とは異なり、やや不明確な型といえよう。殊にこの焦点は様式①+②がもっとも高く、それに対して様式⑤がどの焦点におけるよりも低くなっており、これが大学生女子では168名中わずか3ケースしかみられなかった点などを考えあわせると、過渡期的な、不完全な、あるいは移行的な型というべきかもしれない。この点についてはさらに検討すべきであろう。

この型における他の対象の位置づけはいかなるものであろうか。各様式別の依存得点の配分は Table 8 のとおりになり、他の型同様、焦点の親友がどの様式においても第1位となっている。この型の特徴は17人中8人が愛情の対象を持たず、また、尊敬する人も10人がなく、母親が上位に出ており、逆に父親が低いことである。

Table 8 親友型における mode 別の
object の得点順位

mode \ object	order					
	1	2	3	4	5	6
①+②	A	L	M	R	S	F
③	A	L	S	R	M	F
④	A	R	L	M	S	F
⑤	A	L	R	M		F S

まず、親友とともに存在を支える機能の記述において出現する頻度が高かった母親についてみると、母親は各個人における依存得点で第2位になっているケースが17ケース中8ケースみられ（残りは愛情の対象、父親、きょうだいが2ないし3ケースずつ）、約半数において高くなっている。また、精神生活における価値・意味の記述においても、無答4を除いた13ケースにおいて11ケースまでが肯定的情緒的に記述していて、この型では、一般的にも母親は受容されている傾向があり、前記愛情の

対象型におけるよりは母親は重視されている。

この型における愛情の対象はないものが多く、あるものでは平均すると母親よりも得点は高くなるが、それでも愛情の対象型におけるような「恋人」ではなく、「よき忠告者」、「相談相手」として情緒的に受容される傾向はあるが、10ケースが無答である。存在を支える機能の記述においても出現していないところをみると、中核的とはいえない。

父親は平均してこの型では依存得点が低い。どの型における父親よりも低い。親友型でも高校1年においては様式④では親友・母親・父親という順で上位に出てくるが、高校2年になると一貫して最下位になってくる。精神生活の記述においては、無答3ケースを除く14ケース中10ケースが肯定的情緒の規定を、2ケースが拒否的、そして同情的・中性的が各1ケースとなっており、全体的には受容の傾向がある。また、存在を支える機能の記述においては Table 4 にみたように、「たよりにしている」において母親とともに、「父母」、「両親」という仕方では出現するのがほとんどであり、父親が単独で出されたのは1ケースにおいてのみであった。

次にこの型に属する事例を示す。

事例 37 (高2女子)：家族は父、母、兄と祖母の5人。得点からいえば、親友が90、次が母親76、愛情の対象70、尊敬する人69、きょうだい48、父親26となり、得点から「焦点」とみなされる親友は「必要で、いないと孤独である」と記述されているが、存在を支える機能では「たよりにしている」のも、「心の支え」も「つらい時に思い出す」のも、「世界で一番好きな母親」であるとされ、一度も出現していない。母親は精神生活の意味の規定においても「とても重要で、いろいろ相談にのってくれるし、一番好き」とされ、これがむしろ焦点とみた方がよいと思われる。

様式別の得点で両者を比較してみると、様式④、⑤においては両者は差がなくともに高いが、様式①+②、③などの幼い仕方の様式で親友が母親をひきはなして高く、90と76という得点の差がこの2つの様式における差によっているのをみると、親友も中核的であるといえよう。つまりこの事例ではこの両者が焦点とみなすべきであろう。愛情の対象は「重要で、いなかったらせつない」と規定され、兄も「必要で、いないとつまらない」とされているが、父親は最も得点も低く「あまり問題にしていない」となっている。このケースでは尊敬する人の得点が高いが、それがだれかは不明である。

4) 尊敬する人型

尊敬する人の依存得点が他にくらべて高く、尊敬する

人が「焦点」とみなされる型であり、全体で7ケースみられた。事例が少ない上に、本調査では尊敬する人がどれであるかをおさえることが不十分であったため、この型の特徴はそれほど明確でない。

存在を支える機能の記述においては、前記の中学の先生をあげた1ケースを除くと、それらしい人物が出現することではなく、一般には人間以外のものが出てくる割合が多く、前述の他の類型にくらべ象徴的な度合が大とも考えられる。また、精神生活における価値・意味の記述によれば、尊敬する人は無答2ケースを除く5ケース中4ケースにおいて肯定的情緒的に記述されている。

様式別の得点をみると Table 9 のようになり、様式の別なく一貫して「焦点」とみなされる尊敬する人が最高点を占め、次が親友、母親となっている。そして、愛情の対象、父親、きょうだいが下位になっている。全サンプルにおいて尊敬する人を記入したもので、これはすべて年長の異性であり、その点を考え合わせると尊敬する人が異性である愛情の対象や父親の代理的機能を果たしているのかもしれない。

Table 9 尊敬する人型における mode 別の object の得点順位

mode \ object	order					
	1	2	3	4	5	6
①+②	R	A	M	L	F	S
③	R	A	M	F	L	S
④	R	A	M	L	F	S
⑤	R	A	M	L	F	S

愛情の対象は精神生活の価値・意味の記述においても1ケースが肯定的情緒的、1ケースが中性的に記述しているほかは無答であり、父親は拒否的が3、中性的が1、肯定的情緒的が1、無答が2となり、両者ともややそれらとの距離が予想されるが、いずれにしてもケースが少なく明確でない。

この型を大学生のそれと比較するとほぼ同じ傾向で、尊敬する人、母親が上位で、父親は下位になっていた。特に異なるのは、この型においても高校生における親友の得点の高さである。

5) 〈愛情の対象-親友〉型

2F ならびに準2F型は Table 2 のようにいく通りもの組み合わせがあるが、もっとも多いものが愛情の対象と親友の組み合わせであった。MF型は得点からいって「焦点」とみなされる対象が補い合って焦点の機能を果たしていると予想されるのである。ここでは、もっとも典型的でもあり、また大学生においては両者が競合して

みられなかった親友と愛情の対象が焦点となるという、高校生特有の型ともみるべき、〈愛情の対象-親友〉型についてみることにしたい。

この型は、親友と愛情の対象の依存得点が高より高く、この両者が「焦点」と予想されるもので、20ケースみられた。

まず、この両者が真に焦点とみなしうるかを他の資料でみると、存在を支える機能の記述においては、Table 4 にみるように両者がもっとも高く出現しているが、「たよりにしている」では父・母・きょうだいも多く出現している。母親が「思い出す」で3ケースにおいてあげられているなど、母親も中核的な傾向があるようにもみられるが、人間があげられることの少ない「生きがい」においても、親友、愛情の対象の両者が出現しているなど、この型の特徴といえよう。また、精神生活における価値・意味の記述においては、親友は無答2ケースを除く18ケースで、愛情の対象は無答5ケースを除く15ケースで、いずれも肯定的情緒的に記述されている。このようにこの型では、この両者が中核的になっているといえよう。

様式別の各対象の得点を示したのが Table 10 である。どの様式においても一貫して焦点である2者が高く、その他は様式④を除いて母親・父親の順であり、存在を支える機能の記述においてみられた如く、母親は得点からいっても高い。20ケース中母親が3位になっているものが14ケースあり、また15ケースがこれを肯定的情緒的に記述している。

Table 10 愛情の対象-親友型における mode 別の object の得点順位

mode \ object	order					
	1	2	3	4	5	6
①+②	A	L	M	F	R	S
③	A	L	M	F	S	R
④	L	A	F	R	M	S
⑤	L	A	M	F	R	S

愛情の対象型でみられたように、この型においても愛情の対象を“なし”としているものが2ケースあり、これらのケースにおいては存在を支える機能では親友がでており、実質的には親友が中核となり、愛情の対象にはその期待がなされていることが予想される。

次に、この型に属する典型的な事例を示そう。

事例 39 (高1女子): 家族は父、母、兄、姉と本人の5人。得点からいうと愛情の対象 84、親友 80 で両者が高く、次は母親 59、父親 54、きょうだい(姉) 51、尊

敬する人 42 となっている。「焦点」とみなされる愛情の対象と親友の様式ごとの得点の配分は、親友は様式①+②、③が高く、愛情の対象は様式③、④、⑤、①+②の順に低くなっている。両者は様式③では差がないが、様式①+②では親友が、様式④、⑤では愛情の対象が高く、同じ「焦点」とはいえ役割分化がうかがわれよう。また、精神生活における価値・意味の規定においては、まず愛情の対象は「生活にはりができ、いろいろのことに努力するようになるもとである」とされ、また親友は「親・兄弟に話せないことを話せる、かけがえのない相談相手で、心の中の比重は重い」と記述されている。存在を支える機能の記述では、「心のよりどころ」は愛情の対象と母親、「たよりにしている」のは親友と自分、「心の支え」は親友と愛情の対象、「つらい時に思い出す」のは母親、親友、愛情の対象、「生きがい」は愛情の対象とスポーツとされ、「焦点」とみなされるこの両者が中核的になっていることがうかがわれる。その他の対象としては、得点からいって第3位の母親は機能の記述においても出現し、かなり重要視されていることがわかる。精神生活における価値・意味の記述でも「尊敬できる人」とされている。この事例では父親は「なさない存在」とされかなり距離があることが予想され、兄もあまり意味がないし、姉も「相談相手ともなるが、あまり好きでない存在」としている。このように家族の中では母親との結合を望んでおり、愛情の対象と親友とを中核とし、次に母親もかなり中核的とした依存行動を示している。

要約と結語

本研究は、さきに報告した大学生女子の結果と比較しつつ、高校生女子における依存性の様相を、依存構造というモデルを用いて見、青年中期から後期にかけての依存性の発達の変容に関する示唆を得るためのものであった。その結果、明らかにされたのは次のような点である。

1) 依存構造：大学生同様、高校生においても相対的に強く依存要求を向けられ存在を支える機能を果たす焦点と焦点以外の幾人かの対象が互いに機能的に分化し、その意味において相互関連的な依存の対象の集合を持つことが明らかになった。これらを大学生同様の基準を用いて、焦点が何かによってみると、高校生においてもF型、MF型、準MF型に分かれ、DF型というどの基準にも合致しないものは349ケース中11ケースにすぎなかった。しかし、その分布は大学生のそれとは異なり、高校生ではF型が3割弱でより少なかった。

また、対象間の機能分化は大学生においてより明確になっていると思われた。その証拠としてはまず第1に、MF型、準MF型よりも分化が進んでいると考えられるF型の出現率が、上記のように高校生では低いことである。そして第2にF型においても分化の程度が低いことがあげられる。たとえば、F型の中では殊に愛情の対象型や親友型などではそれがみられた。それは、操作的には、調査I（依存得点）の結果とそれとは独立の調査II（SCT形式の記述）の結果が、大学生におけるほど一致していないことを意味する。愛情の対象型では、得点からは愛情の対象が焦点とみなされ、たしかにこの場合の愛情の対象は他のケースにおけるそれとは異なり、依存行動を相対的に強くひきおこしていると考えられるが、存在を支える主な対象となりえているかというところ、——調査IIの記述の中に愛情の対象が出現するのはこの型においてだけではあるが——必ずしも愛情の対象だけではなく、親友、母親もかなりの頻度で出現している。また、親友型では、むしろ母親の方がより中核的な機能を果たしているとも予想された。

2) 高校生女子における依存性：大学生にくらべ高校生において顕著に異なるのは次の諸点であった。両者の差異は、従来の依存性の考え方からすれば、高校生は大学生よりも依存要求が強いということになるであろう。しかし、本研究の結果では両群においては強度の差異はむしろなく、それは次のようなものであった。

(1) 単一の焦点となる対象としては、高校生では母親、愛情の対象、親友などが多く、きょうだい、父親はほとんどなり得ない。

(2) 女子青年と母親との結合の強さは従来しばしば指摘されるところであり、さきの大学生の資料でもそれがみられたが、高校生においては、母親はより一層強く依存行動をひきおこす重要な対象であった。母親は前述の如く単一の焦点となることも多いし、ほぼどのケースにおいても依存得点が高かった。また、高校生では得点上の基準からは焦点とならない母親でも、機能の記述で出現する頻度が大学生の場合よりも高く、母親が調査IとIIの結果のズレがもっとも大きく、この点から高校生における構造の明確さの欠如が指摘された。

(3) 高校生においては同性の親友が依存行動を生起せしめることが大学生にくらべはるかに多かった。親友は単一の焦点となる場合も多いし、全般的にも得点からすれば母親をしのぐケースが多かった。しかし、親友型は他のF型と比較すると特徴がさほど明確でなく、母親型の変形とも、愛情の対象型への移行型とも

いうべきものを含むようであった。

(4) MFないし準MF型は、大学生におけるように母親型の変形とみるよりはひとつの発達の上にあるにありまだ焦点が明確化されていない、いわば移行型とみる方がよいようであった。

(5) MFないし準MF型のうちで典型的な移行型とみなされたのは、2Fおよび準2F型の中で顕著に多い〈愛情の対象-親友〉という組み合わせであった。この型はその特徴からいって愛情の対象型に近く、それへ移行しつつある型とみてよいようであった。

(6) 父親は大学生にくらべ依存行動をひきおこしにくい対象であり、1年よりは2年という具合に、学年の上昇につれてその傾向が強くなっていた。父親はあたかも母親の付随物のように、両親の1人としてなら依存行動をひきおこせるが、単独では例外的にしか強くひきおこすことがないのであった。特に、大学生同様、尊敬する人型ではこれと競合する傾向があった。父親は依存の対象として受容される場合でも、様式④(保証を求める)や、機能の記述では「たよりにしている」など、道具的な色彩の強い依存行動をひきおこす対象であった。

本研究の資料は横断的なものであり、かつここで用いたサンプルはさきの大学生のサンプルとの同質性が保証されていないので、結果は限定的に考えねばなるまい。しかし現段階において女子における高校生から大学生への依存性の発達に関して得られた試み的な仮説は次のようなものである。

1° 青年中期から後期にかけての依存性の発達は、従来考えられていたような単に依存要求の強度の低下などにあるのではない。それは依存の対象の種類の変化、対象間の分化の進歩、各対象に対する依存の様式の変化、依存要求の強度の変化などについて記述する方が望ましいほど複雑である。この結果からすればある個人の持つ一般的な依存要求というものは想定しにくいと思われる。実際ある対象への依存行動の強度が、大学生になって逆に高くなることも予想された。すなわち、大学生になって増加する愛情の対象型は、そのほとんどが上位群に属しているのであった。これは、もともと依存要求の強度が大のものが愛情の対象を持ったと考えるよりは、

逆に愛情の対象の出現がそれを強めたと考える方が自然のように思われる。おそらく、従来考えられていたように、幼児期に獲得されるコンスタントな一般的な依存要求量が、各対象に分配されるのではなく、ある対象の出現によって依存要求が新たに強くひきおこされることもあるという考え方を支持する証拠になると思われる。

2° 依存性の発達の重要な徴標のひとつは、対象間の機能分化の程度にあると思われる。これは操作的には依存構造がMF型からF型になることである。そして、このF型は青年中期の高校生期には少数ながら出現する。

3° われわれは依存性の発達を“ある対象への中心化から脱中心化していく”と考えてきたのであるが、2°の結果から“脱中心化した後、青年期になってある対象へ再中心化する”と加える方が事実在即していると思われる。焦点とは、この再中心化される対象といえよう。つまり焦点は定着(未発達な状態における中心化が持続したもの)の対象と、この点で異なるのである。

4° 焦点となりうる対象は、発達のには母親から他の対象へ、また同性の友人から異性の愛情の対象へ、などという変化が考えられる。

<付記>

この研究は昭和40年度総合研究「現代社会における青年の人格形成」(代表者 依田新)の一部として行われた。研究をすすめるにあたっては、日本女子大学依田新教授をはじめメンバーの諸先生方からご指導をいただき感謝するものである。

また、本稿をまとめるにあたっては、独協大学波多野誼余夫助教授から貴重なご示唆をいただいた。お礼申しあげる。

文 献

- 江口恵子 1966 依存性の研究(文献総覧) 教心研 14, 45-58.
 高橋恵子 1968 a 依存性の発達の研究 I 大学生女子の依存性, 教心研, 16, 7-16.
 高橋恵子 1968 b 女子青年における依存性の発達「現代青年の人格形成」 依田新(編), 金子書房, 21-44.

(1968年4月4日原稿受付)

RECOMMENDATION FOR USE OF THE "WEIBULL" DISTRIBUTION FOR THE ANALYSIS OF THE FREQUENCY DISTRIBUTION OF TEST SCORES

—An Application of the Theory of the Failure Distribution of System Reliability.—

by

Shigeo Kashiwagi

Labour Science Research Institute, Japan National Railroads

One of the purposes of this paper is to apply the theory of the failure distribution of system reliability (e. g., cf. Barlow et al; 1967) to the analysis of the frequency distribution of test scores.

Assuming that test scores, x s, correlate positively with a underlying ability, we define as follows :

$$\left. \begin{aligned} R(x) &= 1 - F(x) \\ \text{and } R(0) &= 1, \end{aligned} \right\} \quad (1)$$

where

$$F(x) = \int_0^x f(t) dt.$$

And further we define

$$\lambda(x) = \frac{F'(x)}{1-F(x)} = \frac{f(x)}{1-F(x)} = -\frac{R'(x)}{R(x)}, \quad (2)$$

which is called the ratio of success. From (2) we get

$$\left. \begin{aligned} R(x) &= \exp\left\{-\int_0^x \lambda(t) dt\right\} \\ F(x) &= 1 - \exp\left\{-\int_0^x \lambda(t) dt\right\} \end{aligned} \right\} \quad (3)$$

(Davis; 1952, McGill et al ; 1965).

Another one of the purposes is to recommend for the use of "Weibull" (1952) distribution in order to analyze the frequency distribution of test scores. The distribution has often been used in the

studies of system reliability because of its wide applicability. We define the ratio of success of this distribution as follows :

$$\lambda(x) = \frac{m}{\alpha}(x-\gamma)^{m-1}, \quad x \geq \gamma; 0, \quad x \leq \gamma. \quad (12)$$

$$\left. \begin{aligned} \text{Then, } R(x) &= \exp\left\{-\frac{(x-\gamma)^m}{\alpha}\right\} \\ F(x) &= 1 - \exp\left\{-\frac{(x-\gamma)^m}{\alpha}\right\} \end{aligned} \right\} \quad (10)$$

are obtained. Here, m , α , and γ are shape, scale, and location parameters. The shape parameter m of Weibull distribution plays an important role in discriminating the degree of the difficulties and validities of psychological tests. We investigate several data by Lord (1952) and it is shown that the shape parameter m is a surprisingly useful and powerful measure in psychological testing (cf. Fig. 1).

Finally, it should be noted the following. That is, our proposal which is based upon a differential equation model is comparable to Lord's (1952) integral equation model in that the former aims to analyze directly the frequency distribution of test scores and the latter to estimate true-score or latent trait distribution.

DEPENDENT BEHAVIOR IN FEMALE ADOLESCENTS : II

by

Keiko Takahashi

Kunitachi Music College

This is the second of series of reports on developmental changes in dependent behavior (d. b.).

The present study was aimed at investigating d. b. of high school girls and comparing it with that

of college women which had reported in the first article (Jap. J. of educ. Psychol., Vol. 16 No. 1, 1968).

The same procedure was adopted as in the previous study. Two kinds of questionnaires were administered to 349 high school girls. The first one asked a girl how she depended on what object through what modes or ways of, d. b.. Mother, the most intimate friend of the same sex, the love object and five other persons were selected on *a priori* grounds as objects for dependence. The second involved SCT type questions concerning the role or value of each object in her psychic life.

The following points were suggested;

1) Almost the same result with college women was found among this sample.

- (1) A girl reported a considerable degree of d. b.. Its frequency or intensity was the same as that of college woman's d. b.. She generally had a number of objects for dependence. Each object

had a different functional value for her.

- (2) She also had a focus or foci of d. b., i. e., a person who supported her psychological existence and accepted strong need for dependence. Other objects' functions or positions in dependency structure were determined by the nature of a focus.

- (3) When each S was classified according to her focus or foci, e. g., Mother-type, Love-object-type, 2-foci-type, those who had the same kind of focus showed similar behavior patterns to other objects.

- 2) But, the functional differentiation among objects for dependence was fainter in this sample than college women.

- (1) Number of the one focus type Ss, which was theoretically assumed to be much more structured, was fewer.

- (2) A functional value of each object was not so clear in some cases.

THE RELATIONSHIP PERCEPTION AND THERAPEUTIC CHANGE IN COUNSELING PROCESS

by

Kiyoshi Morita

Aichi University of Education

This study is an attempt to test and examine hypothesis 1 (a), (b) and 3 in the experimental hypotheses by G. T. Barrett-Lennard.

By their hypothesis 1 (a), the relationship variables as measured after interviews at initiation of therapy, were assumed to be positively correlated with the therapeutic change during the period of therapy. Moreover, these associations were predicted to be stronger when the relationship qualities were measured from client perceptions than when they were measured from therapist perceptions. However converse results have come out in this research.

The hypothesis 1 (b) predicted that the relationship as measured from client or therapist perceptions at termination of therapy would also be positively associated with change. For this hypothesis this researcher has found that correlation at termination of therapy was stronger in the case of therapist perceptions than in client perceptions.

So far as their hypothesis 3 is concerned, the same outcome has been produced: that is, combined relationship perception total scores of the two participants (clients and therapists) were more associated with therapeutic change than scores of either one